

ラオスの不発弾から 工業生産と世界の未来を考える

中村 祐哉

現在の勤務校等
広島県熊野町立熊野第一小学校

在外での勤務校／帰国年月
上海日本人学校虹橋校／2014年帰国

小5社会科「工業生産に関する単元」と小6社会科「国際協力に関する単元」二つの単元を、「ラオスの不発弾」を教材として連携させ、批判的に考える力と未来像を予測して計画を立てる力の育成を目的とした2年間にわたるプログラム。話し合いの場は、教員も驚くほど活発なものになった。さらに、既習事項であるSDGsとも関連させて、未来の世界の姿とそこにかかわる自分について考えた。



実践・活動の内容

本実践は、小5社会科「わたしたちの生活と工業生産」と小6社会科「世界の未来と日本の役割」の2つの単元を通して、批判的に考える力と未来像を予測して計画を立てる力を育てることを目的としている。

1. 小5社会科 「わたしたちの生活と工業生産」

身近な工業製品調べからはじめて、日本の工業技術力と、技術立国である日本という概念をつかんだ児童に対し、ラオスの不発弾から生まれたスプーンの実物教材を提示。命を奪う工業製品である爆弾が、日本の工業技術によってスプーンになり、食事、つまり命を支える工業製品に生まれ変わっていることを学んだ。児童は、それまで人の生活を豊かにするものとして学んできた工業製品のなかに、爆弾という人を幸せにしないものがあることを知る。さらにそれらの形と役割を変えていくことに重要な役割を果たすのが工業技術力であると落とし込んだ。児童は「戦争と平和について考えた」「スプーンも爆弾も工業製品」「不発弾を生まれ変わらせた工業技術はとても大切」などの感想をもった。

2. 小6社会科 「世界の未来と日本の役割」

小5でラオスの不発弾についてすでに学んでいる児童を対象に実施した。日本の国際支援について学び、その中で特にラオスへのインフラ支援などのODA実績を提示しながら「日本がこれからすべき本当に必要な国際支援とは何か」について考えていった。児童からは最初は「日本が支援をするのは嬉しい」「世界への恩返し」など、「支援をしてあげる」立場から支援は良いことであるという意見が出たが、支援が50年以上続いていることを資料から読み取った後は、日本とラオス双方の立場から、長期間にわたって行われている継続的な支援のあり方を批判的な視点から捉える感想も見られるように

なった。次に、歴史的な経緯を踏まえて現在の支援の課題を考えた。支援が他国への依存を生んでいる現状や経済的自立への道筋を示せていないなどの課題を検討し、未来の国際支援がどのようにあるべきかを話し合った。

さらにこのカリキュラムの最終時には、既習のSDGsに関連付けて、ラオスが「18番目のSDGs」として示している不発弾処理問題を取り上げた。不発弾処理はラオスの国内問題なのか、世界的に取り組むべき問題なのかについて話し合い、最終的にはSDGsに掲げられた17項目だけが世界の課題であるわけではなく、さらに2030年のゴール以降が重要であるという結論を得た。

<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>国際（理解）教育/開発教育 小学校3年 社会科学習指導要領</p> <p>【実施例】</p> <table border="1"> <tr><th>学年</th><th>単元</th><th>教科</th><th>領域/領域外単元</th></tr> <tr><td>3</td><td>1</td><td>社会科</td><td>国際社会</td></tr> </table> <p>【実施目標】</p> <p>1. 世界の多文化・多言語の理解</p> <p>2. 国際社会における「必要不可欠な変数とは何か」を問う</p> <p>3. 国際社会の発展と課題</p> <p>4. 身近な課題（目標達成を促す）</p> <p>5. 身近な課題の解決</p>	学年	単元	教科	領域/領域外単元	3	1	社会科	国際社会	<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>【研究課題の進め方】</p> <p>1. 研究課題の進め方</p> <p>2. 研究課題の進め方</p> <p>3. 研究課題の進め方</p> <p>4. 研究課題の進め方</p> <p>5. 研究課題の進め方</p>	<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>【研究課題の進め方】</p> <p>1. 研究課題の進め方</p> <p>2. 研究課題の進め方</p> <p>3. 研究課題の進め方</p> <p>4. 研究課題の進め方</p> <p>5. 研究課題の進め方</p>
学年	単元	教科	領域/領域外単元							
3	1	社会科	国際社会							
<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>【研究課題の進め方】</p> <p>1. 研究課題の進め方</p> <p>2. 研究課題の進め方</p> <p>3. 研究課題の進め方</p> <p>4. 研究課題の進め方</p> <p>5. 研究課題の進め方</p>	<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>【研究課題の進め方】</p> <p>1. 研究課題の進め方</p> <p>2. 研究課題の進め方</p> <p>3. 研究課題の進め方</p> <p>4. 研究課題の進め方</p> <p>5. 研究課題の進め方</p>	<p>2020年度 JICA地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修</p> <p>【研究課題の進め方】</p> <p>1. 研究課題の進め方</p> <p>2. 研究課題の進め方</p> <p>3. 研究課題の進め方</p> <p>4. 研究課題の進め方</p> <p>5. 研究課題の進め方</p>								

国際（理解）教育/開発教育 学習指導案 (出典：2020年度 JICA 地球ひろば 国際理解教育/開発教育指導者研修)



評価と課題

本実践は、ESD 教育の一環としての側面ももつ。児童は、この二つの単元の学びを通じて、ESD 教育で重視される①批判的に考える力、②未来像を予測して計画を立てる力、③多面的・総合的に考える力を養い、④つながりを尊重する態度で授業に取り組むことができた。

また、すでに1年間学んできたSDGsと組み合わせることによって、2030年という自分たちが大人になっている時代の世界について考えることができた。

毎年実施しているが、その年の児童実態に即しながら、少しずつアレンジしている。児童の反応はとてもよく、積極的に話し合いに参加する姿が見られた。特に(2)においてODA支援額ランキングについて話し合った際は、「日本のランキングはアップすべき・上がってほしい」と「ランキングは関係ない」でクラスが14名対15名と真っ二つに割れ、それぞれが根拠を示しながら、活発な議論が行われた。

世界の未来と日本の役割
6年 **ランキングはUPすべき派**

単元学習キーワード
・国際連合(UN) ・SDGs (持続可能な開発目標)
・ユニセフ(国連児童基金) ・JICA(経済合作開発機構)
・ユネスコ(国連教育科学文化機関) ・ODA(政府開発援助)
・ユニタール(国連情報機関) ・NGO(非営利組織)

◎日本のODA支援額ランキングは世界第4位(2018)でした。学習を進めてきてランキングはどう変化することを期待しますか?
ランキングが上がって欲しい。ランキングは関係ない。
ラオスや困っている国々を助けて日本の信頼性や親りにならという世界に見せるためランキングは上げてほしいです。
◎あなたにとって国際協力・国際支援・国際援助とは?
私はこの3つが国際協力が好きです。私は今の世界の発展のためにJICAが最も好きになりました。その理由は、JICAは世界のために支援と協力を援助してくれているからです。

本時の学びからODA支援額ランキングについて価値判断・意思決定①

世界の未来と日本の役割
6年 **ランキングは関係ない派**

単元学習キーワード
・国際連合(UN) ・SDGs (持続可能な開発目標)
・ユニセフ(国連児童基金) ・JICA(経済合作開発機構)
・ユネスコ(国連教育科学文化機関) ・ODA(政府開発援助)
・ユニタール(国連情報機関) ・NGO(非営利組織)

◎日本のODA支援額ランキングは世界第4位(2018)でした。学習を進めてきてランキングはどう変化することを期待しますか?
ランキングが上がって欲しい。ランキングは関係ない。
ランキングが上がるにつれて他の国々の信頼性も上がっていくと思うけれど、ランキングの順位にならなくても支援をしているだけではいいと思うから支援をすることは意味があると思います。
◎あなたにとって国際協力・国際支援・国際援助とは?
私の国は発展しているから、他の国を支援していくのはいいと思います。特に国際協力では、相手の国と協力して発展させることが大切だと思います。日本は世界を助けているので、日本はいいと思います。

授業時で使用したワークシート

さらに、「55年も続く日本の国際支援は本当の支援と言えるのだろうか?」についての話し合いでは、支援が最初から国家予算に組み入れられている現状から支援依存の問題や、誰のための支援なのかといった本質的な内容に発展した。児童の発言が相次ぎ、この場において私がしたことは、「国際支援の今後」として「支援を増やす・減らす」×「支援を止める・続ける」の分布図を作成した程度であり、「教師の出番はない」と感じるほどだった。教室の様子を見ながら、大きな手ごたえを感じた。

55年も続く日本の国際支援は、本当の支援と言えるのだろうか?

最後に支援してなる? (支援しては)

Q.1 どこに支援が必要なの? (義務的...)

経済より教育、物より人、とまで支援が深い

Q.2 長く続く支援は良いのかな?

頼りばかり、他の国にさせる、自立する気がない

Q.3 誰のための? 何のための支援なの?

貧しい人、困っている人 // 豊かな人、平和、自立
貧しい国、救済したい国 // 自分たちの国(日本)

3人 支援を増やす
2人 支援を減らす
23人

キーワード: JICA

支援してもはや... やめられない、止まらない
支援依存なのかな?

日本とラオスと世界?
ふりかえり
あなたにとって、日本にとって、本当の支援って何?

問題 『55年も続く日本の国際支援は、本当の支援と言えるのだろうか?』

授業時の板書

一方で、批判もある。小5の産業学習である工業生産と、小6の公民的分野である国際協力は、本来初等教育の教科教育社会科の中においては直接的に関連付けることが少ない単元同士であるが、それを本社会的事象一例にフォーカスして紡いだ実践である。「これは社会科ではなく、総合的な学習の時間で取り組むほうが良いのではないか」と、教科の枠を超えて展開されているという評価を受けたこともあった。

本授業は現在のところは私が継続して担当しており、内容を深めたり、対象を広げたりすることができているが、特定の教員しか実践できないということは継続性の点から望ましくないと感じている。今後は内容のブラッシュアップを進め、多くの教員が取り組めるようなプログラムにしていきたいと考えている。

私が扱った教材はラオスや不発弾だが、それにこだわる必要はない。大切なのは2年間で児童の社会的事象に対する思考がどう変容していくかである。私の提案する指導案の通りにすすめてもよいが、外枠だけを残して中身を差し替えてもよいと思うし、むしろ、差し替えをすることによって目の前の児童により即したものとなり、授業や単元での児童の学びの質は向上していくと思う。

本単元は、関連事例であればどんな事象や教材を取り扱っても類似した実践展開ができる。「国際」や「グローバル」にこだわって無理やり外国の事例を引いてくる必要もない。たとえば、地元名産の熊野筆をテーマに展開するなどグローバルな視点からも、この実践は展開可能だと考えている。



実践に至った経緯と提言

広島市の公立小学校に5年間勤務した後に、2012年に上海日本人学校に赴任した。教員だった父がかつて在外校勤務を志していた話を聞いており、私自身も教員になったときから、いつかは日本人学校の教壇に立ちたいと思っていた。

上海日本人学校虹橋校は当時児童生徒1,500名の大規模校で、小5と小6をもちあがり担任した。他自治体出身の先生方と協働することは大変刺激になり、学びへのモチベーションの高い子供たち、教育熱心な保護者と様々な取り組みができた。

当時は中国の大気汚染がひどく、世界的にもそれがクローズアップされていた時期だった。また上海市内でも、鳥インフルエンザが流行しはじめていた。

さらに、中国では反日感情が高まり、各地で反日デモが頻発していた。外出先では日本語を使わないように気を付けているという在留邦人も多く、生活には緊張感があった。日本人学校も外壁に落書きをされたり、物を投げ込まれたりした学校もあった。休校を余儀なくされることもあった。

しかし、学校の現地スタッフは警備を厳重にしたり、市内の現状を知らせてくれたりするなど大変よくしてくれた。周囲の人から心配する声をかけられることもあり、国同士の問題と、人間の心と心がつながることは全く別のものなのだと実感した。

2014年に帰国後は、在外校勤務経験者として国際教育の授業をつくるにあたって、中国の経験にだけ基づくのではなく、もっと汎用性のあるものにしたいと考えた。そこで中国の記憶が新しいうちにほかの国も知って、共通点を探したいと考えて2016年JICA中国センター（広島県東広島市）の主催する国際教育・開発教育指導者研修（JICA地球ひ

ろば主催)に参加した。教員のための1年間のプログラムで、ラオスをテーマに授業を作る研修を受けた。教材化する素材を獲得するための現地訪問で出会ったのが「工業製品としての不発弾」だった。

このJICA教師海外研修からのつながりで日本国際理解教育学会にも参加し、現在、日中韓三カ国共同ストーリーテリングプロジェクトにかかわっている。これは日本国際理解教育学会による中国と韓国との共同研究で、絵本「お姫様の特別な旅立ち」を使って各国で授業づくりをしている。私は小6の特別の教科 道徳で、何不自由ない暮らしを送っていたある姫が退屈に耐えられなくなり旅に出るというストーリーから、違いを乗り越えて多様性を尊重するという事について考える授業を展開した。いずれ各国から実践報告が届くのがとても楽しみだ。

これらの実践にも在外教育施設での経験が生きていると感じることが多い。授業をつくっているときに取り上げる素材に自分の経験を当てはめることがあるが、在外教育施設勤務経験によってその引き出しが多くなったように思う。

帰国後は、国際理解教育への意欲をもっているにもかかわらず、日本の現場とのギャップを少なからず感じた。その意味では、全国海外子女教育国際理解教育研究協議会(全海研)の中国ブロック大会での発表や、機関誌の発行などを通して日本人学校勤務経験のある人とつながることができたのはとてもよかった。同じように帰国した教員が別の学校で頑張っていると考えると、とても励みになった。

上海は、私にとっては大切なもう一つの「帰る場所」となった。その場所、その国との関係を紡ぐことは、これからの自分の人生を豊かにすることにもつながると思う。いつか再び、他の国に住んで、大切な場所をさらに増やしたいと思っている。

世界中にある日本人学校には、先生を待っている子供たちが必ずいる。そこで出会った教え子も、一生大切な存在になる。このかけがえのない経験は、世界中どこの日本人学校でもできることだと感じている。